

# ミニFMを活用した官民協働の情報提供 —道の駅・しりべしiセンターからの取り組み—

北海道開発局 小樽開発建設部 道路課 ○浅井 宏太  
北海道開発局 小樽開発建設部 道路課 嘉見 誠一  
北海道開発局 小樽開発建設部 道路課 高野 眞司

## はじめに

人口減少下において国民のニーズに応えるため、行政だけでなく多様な民間主体を地域づくりの担い手にとらえ、これら民間主体と行政との協働によって、きめ細やかな公共サービス提供が求められている。また、近年特に安全・安心な社会への要望が高まる中、社会活動基盤であり、災害時には避難・救援活動を支える道路に対する期待も高まっており、「平成19年度道路局重点施策」においても、『災害時の道路ネットワーク全体の危機管理体制づくり』がそのテーマの一つとして掲げられているところである。

小樽開発建設部管内でも、国道229号豊浜トンネル岩盤崩落事故や台風18号による大森大橋被災の教訓を踏まえ、ハードとソフトの両面からの災害への備えや機能強化、災害時の道路機能の維持が求められる。

本稿では、「道の駅」などの道路施設からの情報提供手段としてミニFMラジオを活用し、突発的な災害時にも情報提供を行えるような体制づくりを目的として、平常時の情報提供を官民連携によって取組んだ検討結果を報告する。

## 1. 災害時の「道の駅」の活用

### 1.1 「道の駅」に求められる役割

「道の駅」は本来、「休憩・休息機能」「情報提供機能」「地域の連携機能」の3つの機能を併せ持つ施設である。また、新潟県中越地震（平成16年）や能登半島地震（平成19年）の発生時には、駐車場への被災者用仮設住宅や救援ボランティアセンターが設置されるなど、道路利用者や周辺住民の避難所として活用され、防災拠点という新たな役割が生まれている。（図-1参照）

管内の「道の駅」は12箇所（うち1箇所休止中）整備されており、日本有数の観光地を抱えていることもあり、道路利用者（観光客）に対しての重要な情報発信拠点として位置づけられる。災害時には、周辺地域に不慣れた観光客を含め

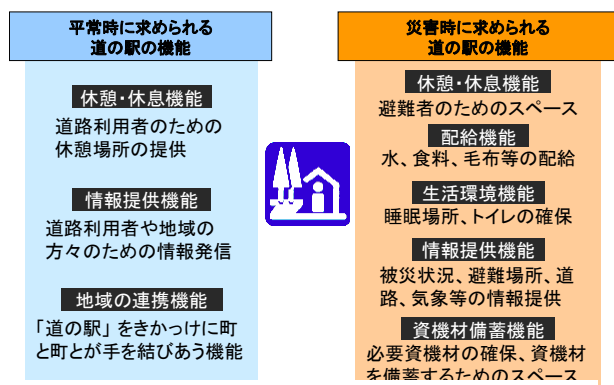


図-1 「道の駅」に求められる機能

た多くの被災者が、情報や救援物資の入手、避難施設の利用目的に管内の「道の駅」を訪れることが予想される。

## 1. 2 「道の駅」における情報提供の現状と課題

現在の道路情報提供は、主に道路情報版やインターネットにより行われており、「道の駅」においても情報端末が設置されているが、これら手段の不利な点は、情報提供場所が限定されることや利用者が求めない限り情報を得られないことにある。また、「道の駅」には道を介した地域の連携や活性化効果も期待されており、これらの一翼を担う情報提供手段の更なる拡充が求められている。

## 1. 3 課題解決に向けて

情報提供場所の限定性及び情報提供手段の拡充という課題を解決するため、不特定多数の誰もが気軽に情報を入手できる手段としてラジオが挙げられる。「道の駅」利用者を対象にした情報提供手段へのニーズに関するアンケート結果でも、ラジオや館内放送への評価が高いことが分かる（図-2参照）。管内の「道の駅」には、「しりべしiセンター（観光案内所）」が併設されている箇所が多く、地域のきめ細やかな情報収集と提供の仕組みが活用できる環境にある（図-3参照）。道路管理者としては、「道の駅」や「しりべしiセンター」を情報発信拠点・コミュニティスポットとして展開することで、利用者を支援する情報提供の充実を図りたいと考えた。そこで、災害発生時や復興段階にも防災拠点として情報提供できるような仕組みづくりを行うことを目的とし、平常時における道路交通情報やきめ細やかな地域情報の発信を試みた。放送手段には、免許を必要とせず簡易な機器や操作で情報発信できるミニ FM を活用し、「道の駅」や「しりべしiセンター」スタッフ協力の下、図-4に示すようなきめ細やかな情報発信を行った。

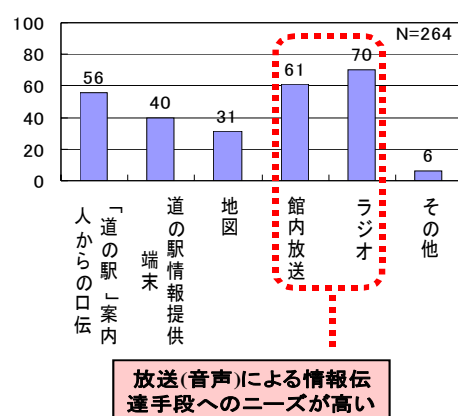


図-2 望ましい情報入手手段



図-3 管内情報提供施設



図-4 情報発信内容

## 2. ミニFMによる情報提供試行

### 2. 1 実証試験概要

「道の駅」の防災拠点化に向け、ミニFM放送が情報提供手段として定着しより多くの道路利用者に利用されるために、放送システムの技術的な検証と同時に、地域の方々が主体的にできる体制づくりの検証を、官民協働の趣旨の基、「道の駅」におけるイベントなどで立ち上げたミニFM放送局からの放送実験を通して行った。

### 2. 2 検証内容

図-5のフローに沿って段階的に実施した実証試験の概要を以下に示す。

#### ①試験放送

日時：平成17年10月23日

場所：ニセコ道の駅

概要：ミニFM機器の電波出力レベルや外部アンテナの種類及び設置場所の組み合わせによる調整を行い、可聴範囲の測定を行った。また、実際の放送を通じたアンケート調査により、道の駅利用者の情報ニーズを把握した。

#### ②多局同時放送

日時：平成18年2月18、19日

平成19年2月9日～18日

場所：小樽iセンターほか

概要：地域イベントである「小樽雪あかりの路」期間中に、小樽iセンターをキー局にして、ローカル局をイベント会場などの複数個所に設置し、インターネットを活用した複数個所での同時放送の技術検証を行った。

#### ③地域主体放送

日時：平成18年7月8日及平成19年7月15日

場所：余市道の駅・ニセコ道の駅・小樽iセンター・岩内道の駅・神恵内村

概要：地域の方々（地域サークルや地元の高等学校放送部など）を主体として、放送の企画や番組作りから実際の放送まで一連の放送づくりを行った。また、実施者へのヒアリング調査によって地域主体の放送の課題・問題点を整理した。

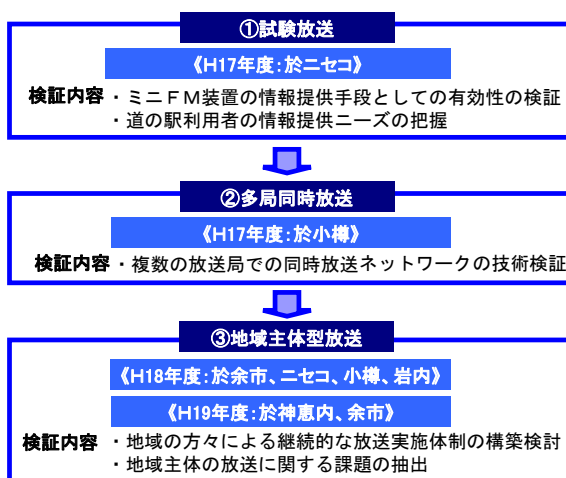


図-5 実証試験の段階的实施フロー

### 2. 3 検証結果

#### ①試験放送

ミニFMが有効な情報提供手段として活用可能であることが明らかとなった。また「道の駅」利用者のニーズとして、「周辺市町村の観光情報や道路情報」などの地域のきめ細やかな情報が求められていることがわかった（図-6参照）。

## ②多局同時放送

インターネットの利用は、通信速度によって放送の音質が左右されるものの、複数局での同時放送を可能とする有効な手段であることがわかった。

## ③地域主体型放送

地域主体のミニFM放送は、技術的にはそれほど困難でない反面、継続的な放送体制の構築に向けて、実施者の労力などの負担軽減、地域のキーパーソンの育成が課題であることがわかった。

以上を、図-7にまとめる。

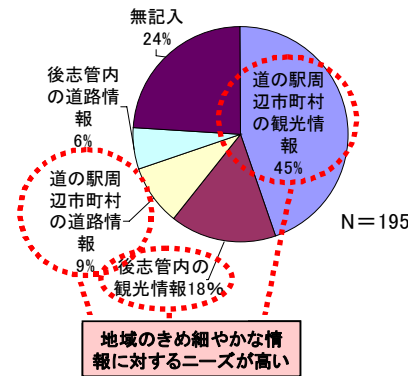


図-6 「道の駅」における情報提供ニーズ

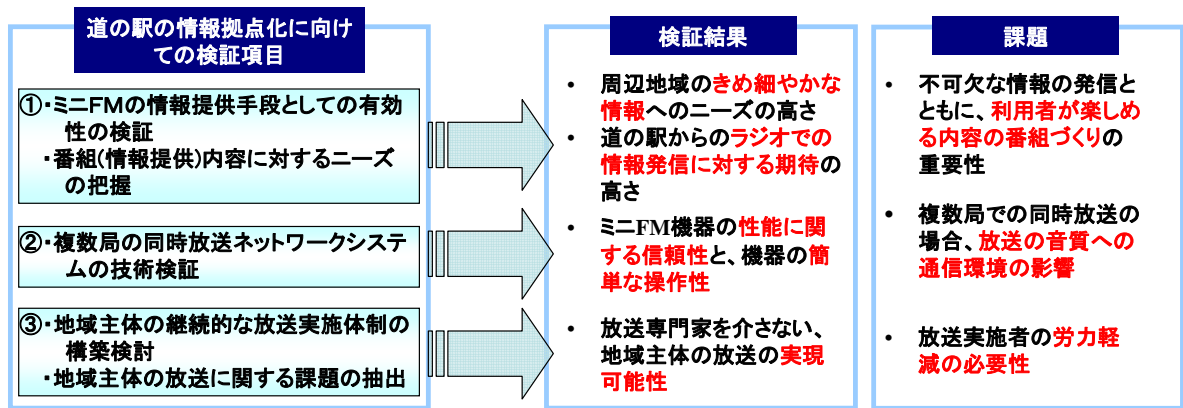


図-7 検証結果と課題

## 3. 今後の展開

今後、管内の「道の駅」や「しりべし i センター」が連携して、管内の広域情報の提供によるドライブ支援や災害時の情報共有・発信を行うために、以下の検証が必要となる。

- 道路利用者の情報提供手段としてのミニFMへの認知度向上のために、地域からの発信による「聞いて楽しくためになる」情報番組内容の検討
- 活用可能な通信手段の利用方法（道路管理用光ファイバーの活用）
- インターネットラジオなどの技術の応用による放送実施者の負担軽減方策

今後は、通信環境の整備や情報共有ネットワークの仕組みを活用して、平常時からの継続的な運用を促進したい。さらに、地域の情報発信拠点を増やすことで情報提供機会を拡充すると同時に、連携放送によって地域間での情報共有や地域間交流の促進を図りつつ、安全・安心できめ細やかな情報提供による広域ドライブ観光支援を充実したい。

## 謝辞

最後に、官民連携によるミニFMからの情報提供実験を進めるにあたり、後志観光連盟しりべし i システム事業運営部会をはじめとし、ご協力をいただいた関係者の皆様に謝意を表す。